うろこ

あっ、と漏れ出た声は誰にも受け取られないまま、部屋の壁を跳ねて、溶ける。一歩部屋に足を踏み入れると、脳が揺れる感触がした。

部屋の右側、白い壁に背をつける低い本棚。その上に置かれた丸い金魚鉢は、とうに私の部屋の一部になっている。見慣れた光景。

そのはずなのに、眼前は薄い膜を通しているみたいによそよそしく、ぼやけて見えた。つけた蛍光灯の光は金魚鉢のふちをなぞりながら反射する。部屋のほこりがきらきらと光って降りていく。

金魚鉢の水面には鮮やかなオレンジ色の金魚がぷかり浮いていた。動揺をうつして関節がギシリとうなる。私は突然の喪失感のため

に、心臓を引き攣らせた。ばらばらと言葉が散っていく。

夜の匂いを巻き込んで入ってきた風に逆らえず、モビールみたいに揺れて、垂れ下がったヒレを動かしている金魚。もうくつがえしようのないことなのだと、頭の端では理解していた。それは映画を見ている時のような、絶対に手の届かない中でのつめたい現実感をまとう。

九月。学校からの帰り道、家の最寄り駅へ降り立った私は人の流れから外れ、立ち止まった。

そこまでの広さはない駅前には、二つ隣り合わせになったベンチと、緑が茂った花壇が並ぶ。ぽつぽつ何か分からない白いつぼみが見えた。夕方の駅は学生が多いせいか、全体の色が明るい。

駅正面のベンチに腰を下ろし、出入り口の人の流れを眺めた。

駅はたくさんの人の話し声と、改札を通過する電子音でだいたいが作られている。

大きな流れによって動く駅そのものが、意志を持つ生き物みたいに思えることがある。体内の私たちは血液と同じように常に動き続けなければいけなくて、つまづいてしまった人はひどく孤立し、そのうちぽいと取り除かれる。

きゃらきゃらとした笑い声に目を向けると、何かやわらかいものが駅から吐き出されるところだった。二、三人分の体積を、その何倍にも膨らませ静かに周りを圧迫する。女子高校生というかたまり。

互いに重なり合いすぎた彼女らは、それぞれの輪郭が曖昧になっている。てるてるぼうずみたいに布で一つにまとまっている大きな

胴体から、白くすんなりした足がたくさん伸びる。僅かに見えるスカートの端。存在ごと、一気に膨らんでぱちんと弾け、また膨らむを繰り返して、風をふくむカーテンと同じように呼吸している。あの空間だけ、細胞がより集まって密度が高い。

彼女らはきっと、とても正しい形なのだろう。それ一つの個として存在できる彼女らはとても素敵だ。私は私一人でも、確かに今あるのかどうか、分からない。私の目の前を、折られたスカートの裾が通り過ぎていく。

「あれ、辻じゃん。何してんの？」

弾んだ声がして、顔をあげる。肩口で切り揃えられた茶髪が斜めに揺れて視界を埋めた。被っていた布がほどけた彼女らは三つに別れて、それぞれの表情をしている。一瞬返答が遅れた。

「ちょっと休憩。電車ひとが多くてさー」

すこし高くした声色は不自然にならない程度に間伸びさせた。そっかー、大丈夫ー、なんて言ってくれている彼女たちの顔は逆光で少し暗い。一言二言、会話を交わして彼女たちは去っていった。遠ざかるたびに輪郭はぼやけて、また一つになる。彼女らはそうやって繰り返し形を変えているんだろう。

ベンチから立ち上がって、駅を背中に歩き出した。彼女らと鉢合わせないように、大通りをから逸れた細い道を選びながら帰る事にした。

灰色の高い壁で出来た影は私を簡単に飲み込んだ。アスファルトは黒い川のようだ。湿った道をしばらく進んだ先、民家の集まりの中に、違和感と共に鎮座する喫茶店があった。薄い黄色の壁に挟まれた、厚みのある黒い

扉。その右横には大きめの窓がはめられていて、下げられた紺のカーテンの隙間から中が伺える。薄暗く埃っぽい店内は年季の入った机や椅子が置かれ、人の気配は少しもない。時々表面がきらきらと見えるのは積もった埃のせいだろうか。

扉の上部についている、カーテンと同じ色の丸いひさしが扉の前に影を落として、全体的に重苦しい雰囲気を作っている。何年も前に廃業したという感じだった。

その薄暗い店先。窓の手前には焦茶色の椅子が置かれ、その上に金魚鉢があった。規則的に波打ったガラスのふちがほんのり青色に染まって、夏っぽい。鉢の下に「ご自由に」と端的に書かれた小さな紙が挟まれていた。

腰あたりの高さにある鉢を上から覗いてみると、中の水は澄んでいて、置かれてからそこまで時間は経っていないように思える。オレンジ色の金魚の背中がちらちら動く。夏祭りの屋台でよく見る普通の金魚。周りを見渡

してもひとけはない。
背の高い塀や建物で囲まれているせいで日が当たらず沈んだ区画の中で、唯一鮮やかに取り残され、何もない鉢の中を泳いでいる。
空は暗くなり始めて、鋭く風が吹いた。

「……さむ」　　ぱち

思わずつぶやいた二文字。それに応えるように小さく聞こえる水音があった。驚いて指が震える。金魚が水面を撫でた音だとすぐ気づいてじっと見つめても、金魚に変化は何もない。心臓に直接触れられているようなざわつきがあった。
ただタイミングが良かっただけだと、私だって分かっている。けれど、ただ一瞬だけでも彼女が確かに私の言葉に応えたと、感じてしまった。

バックがずり落ちてこないように右肩に深く持ち直して、鉢を慎重に持ち上げた。ズ、と砂っぽい音がする。金魚は驚いたのか手の中で見渡すようにくるりと回った。ガラス越しの水が冷たく、底に左手をまわしてお腹のあたりに抱え直す。思ったより重くない。どくどくと鼓動が聞こえる。

役割を終えた椅子をちらりと見ると、底の形にそって砂埃が溜まり丸く型が付いている。

よく見るとずいぶん長く置いてあるようで、脚を取り囲むように雑草が茂って絡みついている。置かれた紙は座面に張り付いて、文字の端々が滲んでいた。

私の腕の中の金魚鉢と金魚だけが真新しく生きている。ここにある、その二つ以外の全ては完結して、停滞している。そういう場所だった。

閉ざされたドアや窓の向こう側に、隅々にまで張り付いた空気と時間の塊がある。隣の

ビルとの僅かな隙間がこの世で一番黒く見えた。店が、ここ一体が不気味に空々しく存在している。早く帰ろう、と思った。

玄関の扉を開けると母がいた。金魚鉢を抱えて立つ私を見ると怪訝な顔をして、けれど何も言わずに自分の部屋に引っ込む。扉がバタンと大きな音をたてた。

廊下に残った目線だけが、私を引っ掻く。

久しぶりに顔を合わせたとしても、必要以上に干渉してこないのはいつものことだ。

母親と二人だけで住むアパート。

玄関から真っ直ぐの、短い廊下を進んだ右側が私の部屋。少し奥の左側に母の部屋があり、突き当たりのリビングにトイレと洗面所へ繋がる扉が計二つ。壁紙はところどころ茶色く変色して、重ねた年数がうかがえる。生まれた時から住む私の家。

生活感が染み付いた狭い空間の中、母との

間にはいつからか明確にずれが横たわり軋んでいる。母は私が起きるより早く出勤のために家を出て、私が家に帰る九時頃にはすでに自分の部屋で寝ている。私はいつのまにか食事を自分で用意するようになったし、それ用のお金がリビングに置かれるようになった。仲が悪いわけではない。ただお互いに、干渉しないように、触れないように生活をしている。噛み合わない生活リズムがそうさせたのか、その逆なのか、分からない。

あの人が私のことをどう思っているのかも、分からなくなっていた。互いに境界線を踏むことはなく、影の影も重ならない。

玄関に立ち尽くしていた私の中から、気づくとじわり、じわり、肌下から外側に滲んでこようとする熱がいた。行き場を失ってトグロを巻き、すぐにでも皮膚を破ろうと伺っている。ぐら、と脳が傾く。腹から内臓をつたって喉元まで、消化の仕方が分からないまま

飲み込んだ言葉がせりあがってきている。

水面ごしにみる足元が左右に大きく揺れていた。つま先は玄関の段差へぶつかる。高い高い壁。壊すべきなのは、私なのか。手のひらから伝わった熱で金魚がゆだってしまいそうで、早く金魚鉢を手放したい。足だけでローファーを脱いで右端に寄せた。部屋の扉を開くと感じるひんやりした空気で、熱をおさめた。

部屋にはベットとローテーブル、本棚が並ぶ。丸型のラグを敷いていても、フローリングは細かい傷が目立ってしまう。部屋の隅に置いた二つの灰色のカゴには服を畳んでしまっている。一番奥の壁はベランダへのガラス戸になっていて、白いレースと青色のカーテンを常に重ねて引いてあり、めったに開けることはない。たまに友達が来ると決まって物が少ないね、と言われる部屋はひどくつまらなかった。

けれど、本棚の上に金魚鉢を置くと、その中で唯一のオレンジ色はよく映えた。

それから、ずっと彼女は綺麗だった。

小さい体と薄いヒレは形だけ見れば平凡なものだったけれど、鉢の中を泳ぐ姿は悠々としていて、振り返るたびにオレンジのうろこが際立ってきらきらと輝いて私の目に届く。ひらりひらりと泳ぐたび、軽やかな息が聞こえるようだった。

彼女が生み出す光は反射するたび、消えることなく部屋に染み込んでいく。日にちを重ねるごとに私の部屋の色を変えていく。彼女を生活の中心に置くことで私は私の輪郭を感じることができた。

あるだけで変化する、素敵な装置。

ネジを巻く必要のないオルゴールのようで、彼女はそれであるだけで意味があった。私に都合のいい意味を含んでくれた。

いくあてのなかった言葉を捨てるように、金魚鉢に沈めるように上からふりかける。彼女はそれを全部食べた。全部全部ひっくるめて飲み込んだ。

「最近、ずっとこの時間に帰ってるの？」

少し咎めるような、探るような声色。九時過ぎの玄関で私は突然突きつけられた。金魚鉢を抱えて帰ってきた日から数週間。十月の半ば。

母が発した言葉は、あの人が思っているよりも、ずっと鋭く、私に届いた。私の肉を裂いて、鉛のように沈んで、体がまた重くなっていく。バックの持ち手を強く握った。

黙っていると、母は返答を待たないまま口を開く。

「学校とか、忙しいのかもしれないけど。あ

んまり遅くならないようにね」

母はそれだけ言って、バタンと扉を閉めてしまった。いつもと変わらない、やんわりとした拒絶。私はそう思ってきた。

愕然とする。

これまでずっと同じ時間に帰ってきていたのに、今さら気づいたのか、とか。

久しぶりにかける言葉がそれなのか、とか。

私の言葉は聞いてくれないのか、とか。

今まで奥深くに溜め込んできたものが、わずかなきっかけをたぐって、一気に溢れ出そうとしてきていた。手足の先から冷たくなっていくのを感じる。あの人が発した言葉のかけらが私の中で反響して大きくなっていく。

ただ、悲しいとか、その一言で済ませたくないと、子供じみた意地を捨てきれずにここまできてしまった。

部屋の電気をぱちんとつける。

「あっ」

無意識のうちに漏れ出た声は誰にも受け取られず、水面には鮮やかなオレンジ色が浮いていた。

小さな網を使って掬い上げ、銀色のトレーの上に横たえるようにして置く。金魚の表面は飴細工みたいに艶めいてつるんとしていた。一緒についてきた水がぱたぱたと落ち、金魚のまわりに小さく水溜りを作る。網がきらきらとしていたので何だろうと見てみると、剥がれたうろこが張り付いていた。

銀色の清潔なトレーに乗せられた金魚は調理を待つ精肉のようで。私は彼女がもう中身のない、輪郭だけのものになったことを生々

しく実感した。

いくらか悩んだ末、ベランダに並んでいる土の枯れた植木鉢、その一つに彼女を埋めることにした。

大きめのスプーンで五センチほどの深さの穴を掘り、トレーの上の金魚を掬った。ベランダと室内の境界線を踏みながら、そっと穴に沈める。水分を含んで少し重たくなった土が、スプーンを持ち上げた拍子にはだしの指に落ちた。土でオレンジ色を塗りつぶして、スプーンの裏側で表面を平らにならす。固まって色の濃ゆくなった土がチョコレートに見えて、変な心地がした。脳の裏側がつめたく満たされていく。

包んで飾るデコレーションは外側ばかりで、中身が伴わなくとも成立する。足の指を伝って落ちた水滴が、足元で茶色い水溜りを作っていた。

植木鉢を元の並びに戻すと景色に埋まり、

中身が何かなんて分からなくなった。ベランダの扉を閉めてしまうと、曇りガラスに阻まれてもう見えもしない。

残った金魚鉢をシンクの縁に乗せて傾けた。勢いよく水が流れていく。

丸かった輪郭が崩れ、銀色の底に当たって散らばった。飛び散った破片がシンクの壁に、まくった腕に付着する。特有の生臭さが鼻をついた。手に持った金魚鉢がどんどん軽くなっていく。

彼女の肌と隣り合った水が、排水溝へと吸い込まれて消えていく。果物の断面みたいな形をしている穴の先はずっと暗いだろう。

私は夜の帰り道が好きだ。自分一人の輪郭がきちんと見える時間、ローファーのかたい音。青く濡れた、自分や橋の欄干の影だけが

確かで、数メートル先はぼんやりとゆるむ。私を中心とした球体だけを切り取ったような手触り。

静かな肯定をひっくるめる、薄くて冷たい膜が肌を掠める感覚が、心地よくて、たまらなく愛おしく思ったんだ。

ガラス越しに彼女を見ていた。その金魚鉢ごと、私の受け皿になってくれていた。かわいそうなことをしたな、と思う。

最後の雫が落ち切る音がする。私の内臓が流れて、崩れていった。

「何してるの」

きゅ、と閉まる音がした。いくつも重ねた固結び。

振り返えって見た母の顔はちらちらとブレ

てよく分からない。私は多分自分で思うより動揺していた。

蛇口の下、シンクの底にからになった金魚鉢を置いた。蛇口を捻ると水が出る。真っ直ぐ飛び出した水は金魚鉢に受け止められて、丸くなっていく。溜まりきった水がふちから溢れて流れていった。口のはしが小さく震える。

「金魚がしんじゃった」

喉にはりついていたつかえが少しだけ、減る。

濡れたスプーンは捨ててしまった。